

Q 景観デザインの最も重要な課題は何ですか？

場所の表層の文脈だけに限らず、深層の隠れた文脈についても十分読み込み、その場所の最も重要な特性を見出すことではないでしょうか。場所によっても、異なりますが、都市の景観デザインでは、都市の持つ歴史や文化といった様々な文脈を十分読み込んで、都市施設や地区の計画をすることが重要です。例えば、秋葉原の再開発を見ると、相変わらず、意味不明の公開空地とそれにより容積割り増しを受けた超高層の組み合わせで、「アキバ」の本来あった特性である、狭隘路地に張り付いた路面店の活況と賑わいという雰囲気が、まったく無視されており、その強引な計画手法に強い違和感を覚えます。都市の文脈を無視したものと云わざるを得ません。

大資本による開発手法ということで片付けられない大きな問題を孕んでいるのではないのでしょうか。つまり、ここでは、行政や社会企業が、「アキバ」という街を将来に亘ってどういう街にしたいのかという理念を、民間によるこのような開発行為に対して、示し得ていないということに、問題があるのです。さらに、再開発区域を越えて、中央通り東側にも、総合設計制度を利用した再開発が行われています。

このままでは、近い将来、あの「アキバ」らしい秋葉原を、わたしたちが失うことになるのは、火を見るより明らかです。

Q 低炭素化社会実現に向けて、景観デザインは、何ができるのですか？

何ができるのみならず、できるような仕組みや体制づくりを急ぐ必要があるのではないのでしょうか。都市景観デザインにおいては、特に、環境負荷をできるだけ削減するような取り組みが、極めて重要であると同時に、それをサポートする仕組みづくりも大切です。

地球温暖化ガス排出等、都市の自然環境に対する負荷は極めて大きく、その削減が緊急課題になっていますが、超高層をはじめ、環境負荷の大きな開発が多い割には、公開空地の緑地が貧弱なものが少なくないのが実情です。地球温暖化ガス排出削減のために、注目されるのが、水と緑の力ですが、欧米諸都市の一人当たりの緑地面積に比べ、極めて少ない東京では、既存緑地の保全とともに、新しく緑地や水面を増やすことが大変重要です。

又、暗渠になっている都市河川を復活させ、近自然工法で修景する手法がありますが、緑と組み合わせることによって、風の道を創り出すことは、豊かな都市景観形成にも繋がるのです。

このように、都市景観デザインが、低炭素化社会実現に向けての取り組みは非常に多いのですが、それをサポートする仕組みができていません。都市や地域の景観形成のために、都市の文脈を読み、街並や建物の外装、構造物の外観、街路の道具や仕掛け等、全体的な景観の調和を図ることは、同時に、低炭素化社会実現に繋がるのですが、そのためには、民と公とNPO等の共同による活動のシステムを創り、社会全体で責任を担う体制づくりが不可欠です。

TDAコミュニティ

前号でご案内した「ネパール・ナウリコット村再生計画」の事前調査報告会が7月10日夕、港区浜松町のコトブキDIセンターで開催されました。参加者は約60名と盛況で、現地の写真を中心に、それぞれ参加メンバー受持ちのテーマ別に報告されました。また、ネパールにおける類似のプロジェクトとして、竹中工務店大阪本店設計部の有志が行ったネパール・ゴルカ地方での、フィリム学校建設プロジェクト（無償資金援助）について、説明を頂きました。同プロジェクトの赤尾代表（竹中大工館 館長）からは、国際協力事業の理想とともに実施にあたっての現実の厳しさも語って頂きました。会場での意見交換も含めて、終了後の懇親会ではさらなる諸課題に、ヒマラヤの山談義も含めて大いに盛り上がりしました。



国際協力事業は日本側の都合だけで物事は動きません。今後、現地の体制作りへの協力も含めて、ハードとソフトなど全体のバランスを取りながらじっくりと進めます。本年11月中旬ごろには、再度、現地調査を行う予定です。詳細は本会ホームページで案内致しますので、ご興味、ご関心ある方は是非、ご参加ください。



NPO法人 景観デザイン支援機構 事務局

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-28-8-302

景観ビジネス 最前線



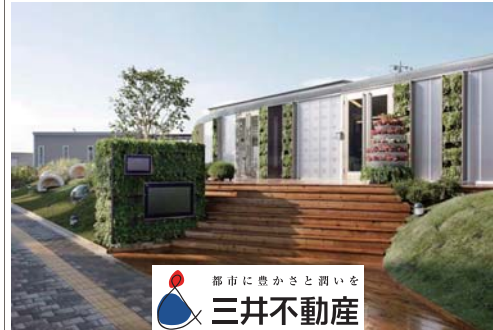
商業施設

約170のショップが集まる大型ショッピングパーク



分譲住宅

不動産開発とその関連事業の空間とサービスを展開



街づくり

「公・民・学」連携による新たな街づくりを推進

三井不動産(株) 柏の葉事務所

千葉県柏市若葉226-44
中央141街区1
Tel.04-7137-2227

編集後記

『景観文化(6号)』の発行が1箇月以上遅れてしまったこととお詫びいたします。

毎月の「景観講座」に加え、10月には総会、11月にはナウリコット村視察ツアー第2弾とTDAの活動も忙しくなっています。

さて、1年間「景観文化」の編集を担当しましたが、今号で広報担当を交代することとなりました。次号からは新しい担当となりますのでよろしくお願いたします。

(広報担当: 栗原)

[デザイン: ㈱アールプランニングネットワーク]2009100500

Tel 080-6722-4114 Fax 03-6459-2221
e-mail: main@tda-j.or.jp
URL: http://www.tda-j.or.jp

景観文化

2009-10-01

TDA JAPAN



インフォーラム

このスケッチはアドリア海の至宝といわれるドブロブニクです。イタリアの東の国境の街トリエステを過ぎるとスロベニアに入りますが、この街は海沿いをズルズルとたどったクロアチアの最南端に位置しています。もともとはベネチア共和国の傘下でつくられたのでイタリアではラゲザと呼ばれ13世紀から19世紀まで地中海を往来する寄港地として自治と自由を謳歌したと伝えられています。建築家には馴染みのCIAMの国際会議もここで開かれていますし、最近では宮崎駿の飛行艇の物語「紅の豚」の下敷きになった街です。今でもイタリア系の人が多く住むようで、それが理由かどうかクロアチアはサッカーも強い。この地域は旧ソ連の崩壊後90年代になって独立紛争があり、この街もユーゴ連合軍の戦火に巻き込まれました。修復直後に訪れたのでオレンジ色の屋根が新旧斑になって修復されているのが解ります。ホテルにはまだ軍人の姿が伺えましたが、街の中心にあるブラツァ通りはもう賑わいを取り戻していました。道中の海沿いは山がせまる地形ですが人工物が少なく島々の眺めはこの上ない景色です。街の直前で数分間ボスニア・ヘルツェゴビナを通過するには驚きましたが、同じ海岸を150km程戻るとこれも世界遺産の古代ローマのディオクレティアヌス宮殿の史蹟を残すスプリトがあります。スケッチは街を巡る周壁から散歩がてらですから着彩が難しい。で、背後に垣間見えるのが碧碧のアドリア海です。

スケッチ塾の八木さん長い間スケッチとインフォーラム有り難うございました。スケッチ塾は継続されますが、他の人のスケッチも見たいという会員からの要望で、今回から数回ずつ別の人が担当することになりました。 TDA代表理事 曾根 幸一

VOL.6-目次

- 表紙
インフォーラム(絵・文) / 曾根幸一
- 見開
TDA テーマリリース
TDA 連続「景観講座」～2009年度景観講座～上半期概要
- 見開
第4期総会 シンポジウム開催案内
- 見開
海外ランドスケープ事情 / 曾根幸一
「ロンドン郊外の55k」
- 裏表紙
情報告知板「景観文化Q&A」 / 櫻井直樹
- 裏表紙
TDA コミュニティ / 編集班
- 裏表紙
景観ビジネス最前線 (三井不動産株)

TDA連続「景観講座」 ～2009年度景観講座～上半期概要

昨年に引き続き、本年度のTDA連続「景観講座」が5月よりスタートした。景観講座は、現在の諸都市が抱える景観デザインにまつわる問題や、地域住民が主体的に景観デザインに関わる基礎的・実践的知識などに焦点を当てている。また、本年は、デジタルハリウッド大学との連携を踏まえて、「景観デザインを支援する」観点から、一層、実践系のテーマを設定した。会場も、ITの中心である秋葉原に移して行われた。詳細は本会ホームページを参照されたい。

●第1講 『環境色彩デザイン』
講師 吉田 慎悟 (色彩計画家、CPC取締役)



色彩は形態や素材と関係して多様な空間を生む。環境色彩デザインはすべての景観構成要素の関係性から生まれ、人々の暮らしを豊かにする空間を創造する。講義は、人間の知覚や見え方を「脳がつくる景色」として、地域が持つ個性的な色については「色彩の地理学」として、土の色など自然のもつ豊かな基調色の重要性を「自然はカラリスト」という、それぞれのキャッチフレーズで説明された。都市や建築の景観デザインに直接、結びつく「色彩基準と色彩調整」については西新井、幕張ベイタウンなどのプロジェクト、さらに中国大同市での調査を

例に説明がされた。建築の色彩計画の基本は色相調和であり、同色相、高明度、低彩度が推奨される。トーンは同じでも色相を変えることは日本では少ないことなど、実践的な説明がされた。

●第2講 『夜景をデザインするという仕事』
講師 面出 薫 (照明デザイナー、LPA代表取締役、武蔵野美術大学教授)



都市や建築において光をデザインすることは、時間をデザインすることである。環境や人にやさしい照明にするために、わずかな光の量でいかにデザインするかが重要である。また、光が目立つのではなく、建物のために光を設けることにより、照明器具をデザインすることよ

りも、都市・建築そのものをデザインすることが大切である、と説明された。

過去に手がけた光のデザインとして、シンガポールの都市照明が取り上げられた。シンガポールでは、国家委託によりトロピカルな夜景創出のためのマスタープラン、光のルールのガイドラインを作成すると同時に、光に対する考え方を広めるための展覧会を開催した。光に対する感覚と数値は異なるためガイドラインは数値で決めず、また光が当たる部分の素材やその反射率を考慮するなどの具体的な手法についての説明もされた。

●第3講 『生活と景観の色彩』
講師 杉山 朗子 (カラーデザイン研究所取締役)



生活面における色彩という視点で、様々な分野との比較から景観の色彩と人々の関わりを取り上げ、色彩計画へのヒントが判りやすく語られた。特に、景観の色彩については時代の価値観やライフスタイルの変化による影響が大きく、これからの成熟社会では風土色がキーワードであること。また、色彩やデザインをイメージスケールという汎用的な尺度で捉

えて評価する手法を、自然景観、景観言語、素材感、柄、花、照明デザイン等にも展開し、実際のデザインである外壁色や舗装面デザイン、街区デザインへの応用について説明された。色彩計画の基本は、どこに行っても石や土、植生など四季の変化に応じて色を測ること。この視点で、札幌、金沢、富山、盛岡、青森、秋田、高山、宮崎などの都市や建物の色についても興味深い評価をして頂いた。

●第4講 『光環境を知る・読む・創る』
講師 近田 玲子 (照明デザイナー、近田玲子デザイン研究所代表取締役)



景観デザインにおいて光は重要な要素である。講義はまず、物の本来の姿を明らかにし、際立たせ、喜びを与える光環境を知ることから始まった。実際のいろいろなシーンにおける明るさについて照度計を使って体感し、さらに近年、白熱灯に替わるコンパクト蛍光灯、LEDなどの新光源の体感が行われた。続いて、その光環境の美しさ、心地よさはどこから来るのか、ひかりの読み解き方について、九州国立博物館での照明設計を例に説明が行われた。最後に、岐阜駅北口広

場での設計を通して、都市的な空間において環境をより感動的に際立たせる光のデザインの実践例、また感動空間の演出として岐阜の鶏飼を例に、風土に根ざした伝統の深さについての説明があった。

●今後の講座予定

▶2009年9月17日(木)
第5講 『パブリック・サイン論』
講師 中村豊四郎 (アール・アイ・イー代表取締役)

▶2009年10月15日(木)
第6講 『街の道具論—都市デザインにおける道具の役割』
講師 宮沢 功 (環境デザイナー)

▶2009年11月19日(木)
第7講 『実務の中の素材』
講師 勝田 (物林)、鈴木 (住軽日軽)、金山 (サントリーミドリエ)

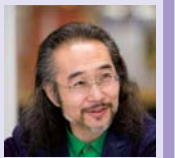
▶2009年12月17日(木)
第8講 『都市空間におけるアート実践』
講師 工藤安代 (パブリックアート・コンサルタント)

会場：デジタルハリウッド秋葉原校
セカンドキャンパス
東京都千代田区外神田3-1-16
ダイドーリミテッドビル7階
※詳細は本会ホームページ参照

第4期総会 シンポジウム開催案内 ～変化する社会と景観 (仮題)～

日時：2009年10月31日(土) 15:00～17:30
会場：(株)コトブキ D.I.センター
東京都港区浜松町1丁目14番5号
JR浜松町駅北口徒歩3分
都営浅草線・都営大江戸線大門駅B2出口徒歩3分

■基調講演 杉山知之氏



デジタルハリウッド学校長、デジタルハリウッド大学・大学院院長、工学博士。1954年生。87年より、MITメディア・ラボ客員研究員として3年間活動。90年、国際メディア研究財団・主任研究員。93年、日本大学短期大学部専任講師を経て、94年10月、デジタルハリウッド設立。マルチメディア放送ビジネスフォーラム代表、福岡コンテンツ産業拠点推進会議会長「新日本様式」協議会、CG-ARTS協会、デジタルコンテンツ協会など多くの委員を歴任。99年度デジタルメディア協会AMDアワード・功労賞受賞。

■ゲストスピーカー 堀内正弘氏



多摩美術大学造形表現学部デザイン学科教授。1954年生。東京藝術大学・美術学部・建築学科、東京大学・工学系研究科・建築学、イェール大学・建築学大学院・建築学ポスドプロフェッショナル終了後磯崎 新アトリエ、エドワード・ララビー・バーンズ事務所 (ニューヨーク) を経て堀内正弘建築設計事務所 建築・都市計画を設立後、(株)アーキソフ計画研究所さらに(株)都市工房を設立。

■コーディネーター 高見公雄氏



法政大学都市環境デザイン工学科教授。1955年生。東京藝術大学美術学部建築科卒業、東京藝術大学大学院美術研究科 (建築設計専攻) 修了。(株)日本都市総合研究所代表取締役。(株)日本都市計画学会評員。

海外 ランドスケープ事情

昨年のTDAの景観講座で「街区」と「路地」の話をした折にイギリスの戸建て住宅の歴史についても触れてみた。画地と建物の入念な連続は景観形成の基礎だと感じたからにはほかならない。その後レッチワースのヘリテージ財団を訪ねてその活動をつぶさに聴聞したいという旅があった。目的はソフトの話だがやはり都市デザインが気になってくる。そこで100年前の田園都市レッチワースからロンドン郊外55kを南下して戦後のステイブナージュ、ウエルイン (現地ではウエリンと発音) そしてハンプステッド・ガーデン・サブスまで一気にたどってみることになった。すでに周知のR・アンウィンとB・パーカーの家並みデザインである。歴史の解説ではJ・ラスキンやW・モリスの思想を引き継いで中世をモデルにしたというこの家型は、尖り屋根だから二階の室内は小屋裏部屋でとても開放的とは言いがたい。しかしこの尖塔をもつ景観こそ20世紀の初めイギリスの上流から中流階級の求めた田園



『ロンドン郊外の55k』



謳歌主義 (パストラリズム) なのである。道路を曲げることで景観を立体的にみせること。カルド・サックをつくって囲み空間を演出すること。それらは条例住宅と呼ぶ味気ないテラスハウスの連続を回避する方法でもあった。ここで注目したいのは彼らが宅地と住宅とを計画的に組み合わせてきた経緯を持つことだ。テラスハウス、セミ・デタッチッド (二戸建て)、デタッチッド (戸建て) と画地の間口を狭めながら前庭と裏庭を確保する合理的な敷地割り。所得の違う人達の意図的な混在。こうした過程をへて住戸を集約化、立体化していったイギリスの歴史と、密度が違うとはいえ集落が木造密住に固まり、そこからいきなり超高層が立ち上がるようなわが国とは別の感覚が市民にもあるのだろう。なおこの辺りの話は、電機大の西山康雄さん、市浦ハウジングの佐藤健正さん、それに今回財団を紹介頂いた神戸芸工大の齊木嵩人さんなどがすでに詳しい。

